

ナチスの影にあって ——山形翻訳者の系譜（４）——

加藤 健 司

（山形大学地域教育文化部）

1. はじめに

「自伝小説」と題された稲垣足穂の『東京遁走曲』では、放浪する自身、佐藤春夫とのこと、伊藤整、石川淳らの足穂評などについて時間・空間を目まぐるしく変えながら語るなか、あるとき「新宿うらのバラック建の酒場」で女給を相手にくだを巻いている自身の姿を描く。すると「傍らで静かにグラスを傾けていたモーニング姿の老紳士が」ひとこと「人間を誼^{のろ}っちゃいかん！」と足穂にいったしなめる。「この人が、あの非常に面白い独逸浪漫派（ブランドス）の訳者、吹田順助だった」（傍点原文）¹。

足穂が吹田と出会ったのがいったい何年なのか、この時間軸を無視してカオス的に語られる『東京遁走曲』から読み取るのは難しいが、おそらく昭和16年17年（1941/42）ころ、還暦を前にした東京商科大学教授の吹田が、京都帝大から『近代独逸思潮史』によって文学博士の学位を得た時期であろう。

吹田順助は、明治16年（1883）年東京牛込に生まれ、開成中学校に編入し斎藤茂吉らと同級として過ごし、第一高等学校では山形出身の阿部次郎やのちに岩波書店を創業する岩波茂雄と知り合う。そして、東京帝国大学独逸文学科卒業後、札幌農科大学にドイツ語講師として赴任してからは、有島武郎や足助素一と親交を結ぶ²。その吹田が鹿児島の第七高等学校教授を経て、新設の山形高等学校ドイツ語主任教授として赴任するのは大正9年（1920）であった。すでにヘッベル（Friedrich Hebbel: 1813-1863）の『ユーディット』をはじめとして翻訳をいくつも発表していた吹田は、山形においても岩波書店からヴィンデルバルト『十九世紀ドイツ思想史』（大正10年，1921）、ヘッベル『ゲノフェーフア』（大正13年，1924）、郁文堂から対訳書として同じくヘッベルの『ガイゲスと彼の指環』（大正12年，1923）を発表す

¹ 稲垣足穂『東京遁走曲』東京：昭森社 1973年，129-130頁。自伝小説というのだから、当然脚色もあろうが、このエピソードは同じ『東京遁走曲』の別の箇所（92頁）にも、「あの巻を閉じることが惜しまれたブランドスの『独逸浪漫派』の訳者の吹田順助」として登場している。「ブランドス」は、Georg Brandesのドイツ語発音での表記。吹田はデンマーク語原著のドイツ語訳から翻訳した。

² このあたりの交流は、小谷野氏が、里見「敦は、ゲオルグ・ブランドスの大著の翻訳を、武郎の友人の足助素一から頼まれていたが、とてもできずに返し、武郎はドイツ文学者の吹田順助宛の手紙で謝り、里見ができないなら自分がやると言っているが、結局吹田が訳した」と描いている。この記述の「ブランドス」は『十九世紀文学主潮』（内田老鶴圃）である。小谷野敦『里見敦伝』東京：中央公論新社 2008年，90頁。

る。途中一年間のドイツ留学などもあり、実際吹田が山形で過ごした期間は長くはない。この初代ドイツ語主任教授は、早くも大正14年（1925）に東京商科大学予科教授兼同大学助教授として、旧制山形高等学校を離れるのである。

吹田は昭和13年（1938）、かつての同僚上村清延と共同作業をして³、前期ナチスの論客ローゼンベルク『二十世紀の神話』の翻訳を刊行する。足穂がとても感心していたデンマークの比較文学者ゲオルク・ブランデス『独逸浪漫派』の翻訳が富山房から出版されたのは、その翌年昭和14年（1939）7月、ドイツ軍がポーランドに侵攻する直前であった。

本稿は、旧制山形高等学校の最初のドイツ語主任教授であり、ドイツ文学・思想史を研究対象としていた吹田順助について、その翻訳のありかたと並んで、最近ようやく語られる機会が増えてきた戦時下のドイツ文学者の心情がどのように揺れ動いたのか観察し、出来るならばその本質の一片を描き出すのを目的としたい。

2. 推敲される翻訳

三回忌に合わせて出版された『回想の吹田順助先生』巻末の「年譜」によれば、吹田は東京帝国大学時代から小説、詩など創作と並んで翻訳もいくつかの雑誌に投稿している。しかし単行本の出版物として吹田の翻訳が初めて世に出るのは、明治43年（1910）のヘッベル『ユーディット』『ミケランジェロ』『マリア・マグダレーネ』（警醒社）である。

その後大正3年（1914）のヘッベル『ユーディット』（南山堂）⁴、大正4年（1915）ブランデス『十九世紀文学主潮・上巻』（内田老鶴圃）、大正5年（1916）『ヘッベル傑作集』（洛陽堂）を挟んで、先述の山形時代の訳業が続く。東京の商科大学に赴任後も、昭和4年（1929）クライスト『ペンテジレア』などを発表し続け、昭和13年（1938）ローゼンベルク『二十世紀の神話』（中央公論社）、昭和14年（1939）ブランデス『独逸浪漫派』（富山房）、ブランデス『亡命文学』、昭和18年（1943）ヘルデルリーン『ヒューペリオン』などを経て、戦後昭和24年（1949）にもシェーラー『ドイツ文学史』（創元社）、『ヘルデルリーン詩集』（蒼樹社）を刊行するなど吹田の生涯を通じての翻訳は枚挙にいとまがない。

本稿では、まず吹田の翻訳の特徴を把握するべく、山形大学小白川図書館所蔵の旧山形高等学校蔵書から大正3年対訳版『ユーディット』を用いて検証したい。同書を取りあげるの

³ 実際には「第一篇は私、第二篇は上村、第三篇は国松（第一章より第四章まで）、私（第五、第六章）、上村（第七章）の分担である」。ローゼンベルク『二十世紀の神話』吹田順助、上村清延共訳 東京：中央公論社 1938年、凡例（XXVI頁）。「私」が吹田であり、「国松」とは、当時吹田たちよりはだいぶ若い、後の東京大学教授国松孝二である。本稿では、引用文献の旧漢字、旧仮名遣いは、基本的にすべて新漢字、新仮名遣いとしている。

⁴ 『回想の吹田順助先生』（「回想の吹田順助先生」刊行会 東京：同学社 1965年）の年譜（253頁）では、南江堂とあるが、正しくは南山堂。

は、そこに朱が入れられ、翻訳文、原文あるいは注に少なくない訂正がほどこされているからである。誰が丁寧な字消し朱線を引き、その上に訂正の文言を記したのかは不明である。筆者の手元にある「回顧と決意——外国文学——」と題された、第二次大戦中に外国文学について書いた吹田の草稿のやや丸みを帯びたのびやかな書体、あるいは同じく小白川図書館所蔵の『ヘッベル傑作集』⁵の見返しに書き込まれた「コノ書ニハ誤植、可ナリ多シ ソノツモリデヨマレタシ 訳者」という鉛筆書きの文字などと、『ユーディット』に細かく書き込まれた朱とを比較検討しても、『ユーディット』の訂正が吹田の手によるものと断言するのは容易ではない。たとえば同書への書き込みと草稿にはおそらく20年以上の隔たりもある。しかしながら、大正10年3月7日に同書が旧制山形高校図書館に登録された当時、図書課長も兼任していた吹田が何らかの理由で手元にあった『ユーディット』を図書館に入れた、その可能性も否定しがたい。その傍証は少なくともふたつある。ひとつには、書き込みが本文へだけでなく、原文の綴り、あるいは対訳の原文脚註にもわたっている点、そしてふたつめはこれからいくつか例示するように、対訳版『ユーディット』への訂正箇所がその2年後に出版された『ヘッベル傑作集』の『ユーディット』に反映していて、尚かつ、対訳版への書き入れ以外の修正も『傑作集』には散見される点である。つまり、『傑作集』の訳を誰かが対訳版に書き入れた可能性もあろうが、もしそうならばその作業が徹底していない疑問がある。いずれにせよ、われわれが対訳版と『傑作集』を対比するならば、吹田が推敲を重ねてよりよい訳を作っていた手順がわかる。

以下、対訳版の修正の種類によって分類しながら、吹田の推敲ぶりを見てみたい。対訳版原文（頁）：対訳版和訳への字消し線「朱の書き入れ」（頁）『傑作集での表記』（頁）の順で示す。そして、最後に「『ヘッベル傑作集』（大正四年）に収められた」『ユーディット』が、「岩波文庫の一卷とし出版されることになったので、全面的に改訳を施した」⁶と訳者が述べている、1951年の岩波文庫版も合わせて頁数とともに示そう。

まずは、対訳版での翻訳ミス訂正である。

(...), spitz war der Nagel,... (72) : 爪のさきは鋭く「釘」(73) 『釘のさきは鋭く』(165)
釘の尖は鋭く (51)

Wenn ich's auch wüßte, (...) (110) : 俺はそれを知っているが「仮令それを知っていたところで」(111) 『仮令それを知っていたところで』(199) たとえそれを知っていたところで (77)

⁵ 『ヘッベル傑作集』吹田順助訳 東京：洛陽堂 1916年。

⁶ 『ユーディット 他一篇』吹田順助訳 東京：岩波書店（岩波文庫）1951年、191頁。

Judith, hab Erbarmen und komm! (178) : ユーディット様, 同情して下さいそしてここを去って下さい! 「後生ですから行って下さい」(179) 『後生ですから行って下さい』(263) 後生ですからいらして [ママ]⁷下さい! (121)

一例目は、英語と同様ドイツ語でも爪と釘は同じ単語なので、翻訳の判断も難しいところであるが、二例目の接続法Ⅱ式、英語でいう仮定法、さらにはwenn... auch「たとえ～でも」という譲歩の表現を見落としたのか、吹田の翻訳においては珍しい誤訳である。ユーディットがホロフェルネスを殺害した後に、ひとが来る前に立ち去るよう促す侍女ミルツァのことは、やはり岩波文庫版で完成するように「後生ですから、一緒に来て下さい」という訳がふさわしい。

また、誤訳には以下のような原文の一部をそっくり飛ばしてしまったものも入れてよいだろう。

(...); ist der Weg zwischen euch und dem Herzen so weit? √ [挿入の意] 「お前とところの隔たりはそんなに遠いかね」(59) 『お前と心情^{こころ}の距離^{へだたり}はそんなに遠い [ママ] かね』(152) お前と心情^{こころ}の距離^{へだたり}はそんなに隔たっているのかね (43)

Das hört ihr an und schlagt nicht an eure Brust und werft euch nicht nieder (...).(92) : あなた方は、これを聴いて、身を投げ伏して「われとわが胸を打ち叩き、身を投げ伏して」(93) 『あなた方は、これを聴いて、われとわが胸を打ち叩き、身を投げ伏して』(181) あなた方は、これを聴いて、われとわが胸を打ち叩き、身を投げ伏して (62)

とはいえ、対訳版の朱はそのほとんどが文章をよりよくするための推敲であり、誤訳というより、堅かった訳文を整え原文の調子をよりよく伝えるための修正である。

(...), den ich wegen der Erfüllung (...). (18) : 俺はそれを満足せしめる為に「それを果たす」(19) 『俺はそれを果たす為に』(117) 俺はそれを果たすために (19)

(mit Gewalt ablenkend) (38) : (無理に彼女を向き直らせて) 「(彼女を向うへ向き直らせて)」(39) 『(無理に彼女を向うへ向き直らせて)』(134) (無理に彼女を向うへ向き直らせて) (30)

⁷ 本稿筆者補記。以下同様の [] 内は本稿筆者が補った、あるいは訂正した部分である。

(...), als könntet ihr in ihm eure eigenen Sünden zu Tode steinigen. (82) : 彼に於いて自分達の罪を打ち殺すことができるかのように「彼を打ち殺したら、自分達の罪が減びるとでも思ったようにさ」(83) 『彼を打ち殺したら自分達の罪が減びるとでも思ったようにさ』(173) 彼を打ち殺したら自分達の罪が減びるとでも思ったようにさ (57)

(...), ich will ihm ein blankes Messer in die Hand drücken (...). (86) : 輝ける短刀を彼の手に押し付け「握らせ」(87) 『輝ける短刀を彼の手に握らせ』(177) 輝ける短刀を彼の手に握らせ (60)

次のような修正は、和訳のやや古びた表現を改めたものである。

Magd (116) : 干婢「侍女」(117) 『侍女』(203) 侍女^{こしもと} (79)

Wahrlich, wahrlich, dies Weib ist begehrenswert ! (148) : げにも、げにも、この女は好ましい奴じゃ！「いや実に、この女は好ましい奴じゃ！」(149) 『いや実に、この女は人好きのする奴だな！』(234) いや全く、この女は人好きのする奴だ！(100)

ここでの二つ目の例などは、『ユーディット』対訳版に入れた朱書きの訂正の他にも、『傑作集』では人物の口調から古びた調子を取り払ったのがうかがえる。たとえば、ここでの引用の直後に対訳版で「恚うなっては私の企ても当然じゃ！」というユーディットの台詞があったが、それが『傑作集』では「恚うなっては私は、当然それを行っても宜いのだ！」、岩浪文庫版では「こうなってはわたしは、当然それを決行しても宜いのだ！」とそれぞれ変更されている。

最後にあげる例は、むしろ吹田の翻訳技術という観点から批評されるべき推敲といえよう。

Vor dem Glanz deiner Jugend und Schönheit (...) (38) : あなたの若さと美しさの輝きで「若々しい」(39) 『あなたの若々しい美しさの輝きで』(134) あなたの若々しい美しさの輝きで (31)

Wir kommen an eine Kluft, breit, schwindlig tief. (98) : 吾々はある山の裂け目の処に来たが、それが幅は広く、眼も眩めく許りの深さなのじゃ。「それは幅は広いし、眼も眩めく許り深い所なのだ」(99) 『そこは幅は広いし、眼も眩めく許りの深い所なのだ』

(189) そこは幅も広いし、眼も眩めくばかりの深いところでした (68)

Bewundere das nicht, es war eine Torheit. (152) :それを賞めるな, 愚かな振舞に過ぎないからな。「そんな事を感服して貰っては困る」(153)『そんな事を感服して貰っては困る, 愚かな振舞に過ぎないからな。』(238) そんなことに感服せんでもええぞ。われながら莫迦らしいことをやったものだテ (103)

Ja, ja, die Kraft ist zum Selbstmord berufen, so spricht die Weisheit, die keine Kraft ist. (156) :そうじゃ, そうじゃ, 力は自殺という職分を持っている, 恚う力でない真理が言っている。「知識が言っているが尤もその知識たるや力でも何でも無い」(157)『そうじゃ, そうじゃ, 力は自殺という職分を持っている。恚う知識が言っている。尤もその知識たるや力でもなんでも無いが』(242) そうじゃ, そうじゃ, 力というもののは自殺するという使命を持っている——とは, 昔からの教訓にある言葉じゃ。もっともその教訓おしえにしたところで, なんの力にもならないんだが (105)

最初の例は, 直訳であった対訳版の文章を「若さ」という名詞から形容詞, しかも「若い」ではなく「若々しい」という語に変更して修正している。翻訳においていわゆるSource Language (起点言語) とTarget Language (目標言語) で品詞が変えられるのは, 珍しくないが, その技術は翻訳者の目標言語能力に多くを負っている。たとえば引用の二番目で「広く」を「広いし」とさらに形容が続くのを期待させる表現に入れ換えている事実は, 吹田のその言語能力, もしくは言語感覚をよく表すのである。三番目の「それを賞めるな」が「そんな事を感服して貰っては困る」というのも確かに前者の直訳はあまりにも意が通じづらい。かといって後者は意識し過ぎではないか, という指摘もあるかも知れない。しかし, 筆者としては過剰な翻訳ではなく, ドイツ語の命令法とnichtという否定の組み合わせが「～困る」という語にきれいに移されていると考える。最後の例は, 推敲した結果「尤もその知識たるや…」と原文の順序に合わせているが, これも「確かに…という意見がある, しかし, それは～ではない」と論理の流れからしても, 修正した翻訳のほうが関係代名詞を後ろから翻訳したような対訳版よりも遙かに優れている。当初からだいぶ悩みながら翻訳を進めた箇所でもあったかも知れない, 岩波文庫版では, その論理の流れを活かしつつ, die Weisheitに「昔からの教訓」という訳を与え, さらに後半部分も「その教訓にしたところで」と原文をやや補って, 読みやすさを優先した翻訳とした。

このように, 吹田の翻訳を修正された箇所を中心に観察すると, 吹田という推敲する翻訳者を見出せよう。おそらくは原稿段階からすでに, よりよい訳のため手を入れ続けるのでは

ないだろうか。吹田が自身の翻訳、あるいは翻訳一般について記した文章はなかなか見出せないが、師のひとりである藤代禎輔（1868-1927）が亡くなった年に書いた「藤代先生を憶う」という文に、吹田の翻訳への思いを読むことができる。1929年に出版されることになるクライスト『ペンテジレーア』の訳について、なかなか難物だったその翻訳をようやく仕上げた藤代に不審の点を質問しようとしたところ、「その訳稿を先生が全部校閲されるという事になった。そこで——自分の欠陥と恥とを暴露するような次第であるが、正直な心持をいうと、僕は内心少々不服だった」という。なぜなら「この年になって [四十も過ぎて] 今更……というような、一種の不服を感じ」たらしいのである。しかし結局多くの訂正や意見をやりとりして、藤代に心から感謝する。そして、次のような指摘を受けた翻訳箇所を正直に挙げる。「今でも思い出すのは、『ペンテジレーア』のはじめの方に“und dicht zur Mauer drängen wir die Spiesse”とあるのを、僕は少々変だとは思ったが、『吾々は城壁の近くで、槍をさし向けて突進した』という風に訳して置いたのを、先生は、そこは槍を密集させた、もしくは槍ぶすまを作る意だと、注意された。僕はスッカリまいって了った。そして(…) あんなに無造作にやって退けたのを、深く恥じ入って了った」⁸。つまり、吹田が「dicht 密接した」という語を「zur Mauer城壁に」という語に係るものと誤って判断したのを、藤代はむしろ「drängen wir die Spiesse槍を持って突進した」という表現全体を修飾するものと指摘したのである。この報告ひとつを読んでも、訳文には気をつけ、そして「恥じ入り」はするかも知れないが、修正してよりよい翻訳にすること自体は厭わない吹田の姿が見て取れる。

そして先に述べたように、ここで比較に使用した対訳版で、

285-287. euch vergüten, 汝等に償わしめる。神は汝等の罪業を消滅せしむる為に、十代目の孫までも、汝と同じ死と死苦とを与える。(78)

といった、脚註の形の文法解説がそっくり削除されていたり、

(tritt herein) (114) : (入来する)「(入り来る)」(115)『入り来る』(203) 入り来る
(79)

のような誤植の修正まで施されているのを見ると、旧制山形高等学校所蔵の当該対訳版の修

⁸ 吹田順助『緑野抄』東京：白水社 1935年 所収「藤代先生を憶う」(1927.7), 140-141頁。藤代禎輔は、よく知られるように夏目金之助と留学の旅をともにして、漱石『吾輩は猫である』の発表後、作者はドイツの作家E.T.A.ホフマンの『牡猫ムル』を知っていて『吾輩は猫である』を書いたと指摘した、漱石の友人のドイツ文学者である。

正はやはりほぼ間違いなく吹田本人によるのでないか、と想像されるのである。

3. ナチスを翻訳するひとたち

昭和30年（1955）の『中央大学七十周年記念論文集』では、当時の文学部長吹田も「日本の短詩形と内面的形式」という論文を寄せて、ドイツ文芸の内面的形式 [innere Form] という概念を日本の短詩形文学の説明として比較文学的に適用する試みを論じた。その吹田論文に続いて「二つの世界と二つの魂」と題してヘッセの『ガラス玉演戯』を考察するのは、吹田と同じくたくさんの翻訳をしたドイツ文学者高橋健二（1902-1998）である。その論文で高橋は、「ナチスが精神や真理やことばをゆがめればゆがめるほど、作者 [ヘッセ] はますますそういうものに純粋に奉仕する世界を描いた。これ以上大きな隔りは考えられない二つの世界の対照である」⁹と記している。

このように戦後ナチスに批判的な文言を記した高橋は、よく知られるように第二次大戦中昭和17年（1942）から、初代の岸田國士を引き継いで大政翼賛会文化部長を務めたひとである。最近の戦中のドイツ文学者に関わる研究は例外なく高橋には厳しい。「あまりの翻訳の多さから『翻訳工場』などと悪口を言われたが、既に生前からそのナチス礼賛、戦争協力の過去を追求する声はあり、最近も高田里恵子、関楠生が行っているが、未だまともな年譜も伝記もなく、要するに高橋は、ペンクラブ会長を務めたといっても、二流の文学者でしかないからである。その著作には生氣や個性、独創性がない。ナチス礼賛といっても、そういう男のしたことと思うと、批判するのも虚しい。高橋健二は、翻訳し紹介する凡人だったのである」¹⁰。戦中『ナチス運動史』¹¹を訳したり、文化部長の仕事としてあちこちを訪れ宣伝に勤め¹²、戦後にはヘルマン・ヘッセ、エーリヒ・ケストナーといった反ナチ斯的文学者の翻訳者と知られた高橋は、たとえばこのように批判されている。ローゼンベルクを翻訳した吹田に

⁹ 『中央大学七十周年記念論文集』中央大学（非売品）1955年、403頁。

¹⁰ 小谷野敦編著『翻訳家列伝101』東京：新書館 2009年、163頁。ここで小谷野氏が挙げる高田氏の論文（高田里恵子『文学部をめぐる病 —教養主義・ナチス・旧制高校 京都：松籟社 2001年』）は、多くの資料に拠りながらもその批判が、客観的というよりやや傍観者的な、自分たちはこの歴史—太平洋戦争という—を作っていない、という立場からに過ぎるのではないかという疑問が筆者にはある。

¹¹ ヤーコブ・ザール前ナチス党東京支部長『ナチス運動史』高橋健二訳 東京：アルス 1941年。残念ながら、当該書には訳者あとがきなどはなく、この翻訳についての高橋の声を聞くことはできない。

¹² 杉森久英『大政翼賛会前後』東京：筑摩書房（ちくま文庫）2007年、第十章から第十二章。杉森氏の著作を読むと、高橋文化部長時代にはすでに大政翼賛会文化部はそれほど熱のこもった先鋭的な存在とはいえなかったとも感じられる。しかし、少なくとも例えば昭和19年（1944）の「茶道雑誌」（第八巻第二号）などでも、高橋は「高橋健二氏を囲んで」と称する座談会で、動の時代における静の担い手として茶道にも戦争中の意義を認める発言などをしているのは確かである。「その簡素の中の豊かさというものが今こそ国民の生活にとって必要になって来たと思う。戦争生活をして行けば行く程、簡素になって行くけれど、簡素になっても野蛮人の生活になってはならない。併し簡素に味いをもって行く。そこに茶道というものが決戦下の生活に占むべき意義役割を多分にもっていると思う」（22頁）。

ついても、たとえば上の引用文にも登場した関氏は、「ローゼンベルクの主著『二十世紀の神話』は、吹田順助、上村清延の共訳ですすでに昭和十三年八月に中央公論社から刊行されていて、こういう状況は当時論壇で活躍していたこれら知名のドイツ文学者たちが多かれ少なかれナチス色に染まっていたことを窺わせる。」¹³と、ある意味ごく簡単に断定する。しかしながら、例えばその前年昭和12年（1937）に出版されたヒトラーの『わが闘争』において、訳者大久保康雄が「吾々にとって余り興味のない部分は割愛し」¹⁴た翻訳であると述べ、一方で序文では塩野季彦が高揚した調子で「以って他山の石として」と礼賛し、そのまたもうひとつの序文で風見章が「所詮は独逸のものであるに過ぎず、我等の承伏し難き点多々あるのである」と客観的な文章を寄せているという風な受容の多面性を考えると、「多かれ少なかれナチス色に」が事実であるにせよ、われわれとしてはなぜそうなっていったのかを知りたいのである。

昭和13年（1938）の吹田順助の著作『近代独逸思潮史』第四編の第七章は、「ナチスと独逸浪漫派」¹⁵と題された。そのなかでまずはロマン派とナチスの異同について各論的に述べたのち吹田は、十九世紀のロマン派が持っていた国民の観念にはナチスのそれが持つ「血」の要素が欠けているが、第一次大戦後の国際関係、ロシア共産主義、世界のユダヤ化の脅威、民族主義の勃興がナチスに「血」を意識させたのだと論じる。同書の昭和17年（1942）の大東出版社版では、この「旧版の末章をなしていた「ナチスと独逸浪漫派」—この文は或る必要から拙著『独逸精神史』¹⁶に再録されたので—を省き、それに代うるにゲーテの「世界文学」の概念を論じた一文」¹⁷が入れられた。

「ナチスと独逸浪漫派」に代わって置かれたこの「ゲーテと『世界文学』」の章で吹田は以下のように論じる。「ゲーテの説を通読してみると、吾々は彼の謂わゆる『世界文学』の概念が、少なくともその表現においては、そうはっきりしたものではなく、いろいろの関係において多少浮動的であることを認めざるをえない」¹⁸。さらに「いろいろの努力から、[ゲーテが] 不断に求めていたところのものは、文学によっての世界の教化ということに外ならなかった。そして彼 [ゲーテ] は、ドイツが蓋しその媒介者及び主導者として任務づけられているという確信を持つようになった」¹⁹と述べる。そして、「アルフレート・ローゼンベルクが彼の民族主義の立場からオトマール・シュパンの全体主義（普遍主義）を空虚なものとして

¹³ 関楠生『ドイツ文学者の蹉跎 ——ナチスの波にさらわれた教養人』東京：中央公論新社 2007年、24頁。

¹⁴ ヒットラー『わが闘争』大久保康雄訳〔編訳〕東京：三笠書房 1937年、366頁。

¹⁵ 吹田順助『近代独逸思潮史』東京：南郊社 1938年、390-406頁。

¹⁶ 「或る必要」とは、おそらくその論文集『独逸精神史』に「ナチス篇」という一項目を立てて幾つかの論考をまとめたためだろう。吹田順助『独逸精神史』東京：畝傍書房 1941年。

¹⁷ 吹田順助『近代独逸思潮史』東京：大東出版社 1942年、改訂版序。

¹⁸ 『近代独逸思潮史』大東出版社、394頁。

¹⁹ 『近代独逸思潮史』大東出版社、398頁。

痛撃していることは、すでに多くの人々の知っている処であろう。（…）ローゼンベルクの論法を目下の吾々の問題に当てはめてみると、始めから『各国民の道徳的・美的一致』を目標とし、それを示現せんとするような『世界文学』は、要するに空虚な全体主義に比すべきもので、（…）国民文学こそ、真の世界文学の実質を成すものといわねばならない²⁰と論じる。すなわち、ゲーテの「世界文学」とはドイツ国民文学が責任を果たす役割を担う意味での世界文学である、という解釈へと広げ、ローゼンベルクを援用して結論している。ロマン派を中心に論じて、ナチスの現況と比較してみせただけの「ナチスと独逸浪漫派」のほうが、よほど穏当とさえ思えてくる。

なぜ吹田たちはナチスを論じ、讃辞を記していったのだろうか。吹田についていえば、昭和14年（1939）上梓した、およそナチスとは結びつかないような、十九世紀前半のドイツ小市民的気分を指すキーワードを論じた著作『ビーダーマイヤー文化』²¹に、その答えの一端がうかがえるように思われる。

ドイツ文学で一般にビーダーマイヤーといえば、「非政治的な、国家的出来事に無関心な、保守的な仲間内の結びつきという狭い範囲に、諦念をもって後退することであり（…）、家庭生活、家族や友人同士での団らんこそが、ビーダーマイヤー文化の内面的精神的基本となる」²²。このように戦時下の国民に要求されそうな態度からはかけ離れるビーダーマイヤー文化について、吹田もまずは「特にわが日本が東亜における重大な使命の下に、強大な列強を向うに回して」いる時期、「奉公と犠牲、緊張と奮闘——この精神が常にわれわれを指導するべきであって」、「こういう時代において、断念と逃避と傍観というような、時代的に最も不向きな要素の多くをもったビーダーマイヤーを」論じるのは無意味ではなからうか、と問いかける²³。しかし、「ビーダーマイヤーにはやはりわれわれにとって再考を値打ちする幾多の美点が存していたし、永久性を要請しうる要素も」持っているとして、以下のように指摘する。ビーダーマイヤーの断念とは、大それた空想・野心を放棄するという意味であり、その点ではむしろ積極性を示唆している。空虚な高慢こそ唾棄すべき態度であり、自制と謙抑は常にひととして忘れてはならない。「家族的傾向、小なるものへの愛、自然の愛、民族、郷土への愛、蒐集と保護」もどんな時代であれ、心に留め置かれるべきものである。こう吹田は述べて、次のようにまとめる。「国家危急の秋に当たっては、何人も家を忘れ、一切をなげうち、剣を以て起つべきであるが、それはそれとして、もしわれわれが家を重んじ、小なるものを愛し、自然の美を讃嘆し、民族の精神に生き、郷土の土をなつかしみ、孜々として家業

²⁰ 『近代独逸思潮史』大東出版社、403頁。

²¹ 吹田順助『ビーダーマイヤー文化』東京：弘文堂書房 1939年。

²² Metzler-Literatur-Lexikon: Begriffe und Definitionen. hrsg. von Günther und Irmgard Schweikle. 2.Aufl. Stuttgart: Metzler 1990. Biedermeyerの項。

²³ 『ビーダーマイヤー文化』、108頁。

と労作にいそむ心持を失うならば、それは人間として最も貴重なるものを放棄したことになるのである。枝葉の繁栄を欲する者は、常に地中の根を養うことを忘れてはならない。ビーダーマイヤーにおいてわれわれが認定しなければならない点は、人間の『根』に立脚している点である。ドイツ民族に固有なる深厚なる心情、内面性、土に根ざせる民族性——この根幹に根ざしているところに、ビーダーマイヤーの不朽の価値が存する。（…）言わばわれわれにとっての『米の飯』であり、『地の塩』でもある²⁴。いうまでもなくナチスは、単純なナショナリストの集団ではなく歴史的・思想的にもきわめて多面的な性格を持つ。結果、その多面的存在のいずれを是としていずれを否とするかは、それを選ぶもの次第という様相をみせる。吹田についていえば、別の著作でも、「ナチスの共同体の概念の裡には、性格価値と理想とによつての・有機的に〔ママ〕血液的なる結束が共に含有されて」おり、「『土と血』の強調によつてナチスは、個人主義と全体主義とに画竜点睛を行わんとしている」²⁵と、ローゼンベルクの第三篇第三章を引きながら論じている。ここで描かれた「土と血」のナチスのありかたと、『ビーダーマイヤー文化』の現代的意義を考えるなかで図らずも吹田が強く論じた「地」や「根」そして「郷土の土をなつかし」むことへの賞賛、そして「土に根ざせる民族性」なるもの——吹田のいう「民族」は、このようにむしろ郷土と結びついた民族のイメージであり、そもそも曖昧な民族という概念自体がさらに主観的・選択的に絞り込まれているように思える——とが重なって、それが吹田自身のナチスへの共感の一部を成したのではないだろうか。

こうしてみると、『独逸精神史』の「もとよりナチス・ドイツにおいても、吾々はそのに自己の生活権の主張を立ち超える征服欲の存することを否定するものではない。しかし（…）それはどこまでも正当なる——正当と不正当との区別はこの場合極めてデリケートな問題であるが——生活圏の獲得と永続的な世界平和に対する新秩序の回復とを目標としているのである」²⁶といった吹田の指摘に見られるナチスへの限定的な賛意を支えているのは、「土と血」とくにその前者について日本のそれと照らし合わせての共感であったのは疑えない。そして、そのような吹田の姿は同時代から、「日本の思想界の動揺の波濤は当然先生にも影響を与え、時代の思想に敏感であられた丈に昭和十年前後から後の先生は思想の重圧を強く感ぜられたように」²⁷も見えたのである。

²⁴ 『ビーダーマイヤー文化』、109-111頁。

²⁵ 『近代独逸思潮史』南郊社版、403頁。

²⁶ 『独逸精神史』299-300頁。

²⁷ 『回想の吹田順助先生』、41頁。

4. 推敲し続けるひと

昭和16年（1941）、おそらく稲垣足穂が吹田に出会っていたころ、『ナチス新鋭文学選集』²⁸が出版された。「東京日日新聞」にその書評を記したのは高橋健二である²⁹。七人の翻訳者の代表は山形出身のドイツ文学者逸見廣であった。他の訳者としては、逸見が早稲田のドイツ文学専攻で知り合った中谷博などの名前が並ぶ。この短編選集のあとがきに代えて逸見は「ナチス文学に就いて」解説をしている。「それならナチス文学とは具体的には如何なるものか、その綱領のようなものを知りたいだろうと思う。然し有るか無いか、僕は残念ながら知らないのである」と、確かにナチスの思想自体が変遷していったがゆえに、ことさら統一的で明確な定義が困難な「ナチス文学」の特性を、逸見は「知らない」という文言で指摘する。そして、「日本ではナチスの文学は何んなに恐ろしいものかなどと思っている人もあるらしいが、実際の作品は案外普通である。ただナチスの指導精神が欲求する文学は、飽まで、『健全なる国民文学』である事は確かである」。残念ながらここに読み取れる逸見の解説には、客観的というよりはある意味無責任にも見える、対象への心理的距離感がそのまま記されている。戦後逸見の古稀を祝って上梓されたい『逸見廣選集』³⁰の本人による年譜には、翻訳や解説ではなく逸見自身の創作を並べた選集のための年譜だから、と信じたいが『ナチス新鋭文学選集』の文字はまったく記されていない。逸見は、戦後すぐにアンソロジー『ゲーテ 希望の書』を上梓する。そこでは、「高い意味に於て、最も独逸人らしい独逸人」ゲーテの「作品に示された人物と言葉は、すべて彼が謂う処の『人格』の背光を担うものであつた」と述べられる。われわれがそこに敗戦直後のドイツ文学者が戦中の自分自身を直視する姿を見いだすのは難しい。高橋にせよ逸見にせよ、あるいは内心忸怩たる思いを抱え続けていたのかも知れない、しかし少なくともその心情を積極的に文章に残した形跡がない。あたかも戦後の新しい時代に適応してゆくようにも見えるこの文学者たちの姿は、吹田にもびたりと重なるのだろうか。

ローゼンベルクの翻訳について戦後吹田は次のように述懐している。「私は開き直っているほどの事でもないが、いわゆる全体主義者でもなく、むろん軍国主義者でもない。それがああった本〔『二十世紀の神話』〕の翻訳を引き受けて、ナチス精神の鼓舞に一時力瘤を入れたような観があったのは、明治人にありがちな忠君愛国の精神——戦争が始まった以上日本を負かせたくないというような——も大分手伝っていたであろうし、とにかく総じてナチス精神というものをいわば理想化して考えていた結果であることは、なんとしても争われな

²⁸ 『ナチス新鋭文学選集』逸見他訳 東京：春陽堂書店 1941年。

²⁹ 『ドイツ文学者の蹉跎』、132頁。書評については筆者未見。

³⁰ 『逸見廣選集』東京：校倉書房（非売品）1969年

³¹ 逸見廣編『ゲーテ 希望の書』東京：新人社 1946年、5頁。

ナチスの影にあって
——山形翻訳者の系譜（４）——

い]³²。若干及び腰にも見えるが、吹田はここで過去の翻訳を振り返り当時の自身を分析しようとする。少なくともここには、以前の過誤に眼をつぶろうとする、糊塗しようとする姿は見られない。このように自身の戦中の翻訳を振り返ることができたのは、ひょっとするとナチスについても吹田が常に学問的スタンスは失わなかったゆえではないだろうか。「戦時中の教職員の行動乃至著作活動が調査され、戦時中の国策に積極的な協力をしたという形跡のある者は、追放されるということになった」³³ときに、おそらく吹田の文章でもっとも問題とされたであろうローゼンベルク翻訳の解説文で、訳者吹田自身がすでに次のように述べているのは、やはり注目に値する。

「私は今、本書の内容を一々批評すべき余裕と意図とを以ていない、（…）。ただ一言、私は著者の根本の立場に対する心構えについての私見を述べて置きたい（それは然し批評の意図において書かれるものではない）。というのは、本書のライトモチーフなる血の神話、血の宗教は人種学的であり、従ってその意味においては自然科学的であるが、それと同時に寧ろ信仰の範疇に属するものであり、全篇は言わば個人的なベケントニスベケントニスの書である、という事である。（…）本書に啓示されたる思想は（…）ゲルマン的・独逸的な心術に深く根ざしているものであり、独逸人からでなくては生れえない性質のものである。そこに本書の根強さと長所があると共に、見方によっては限界があるとも言えよう」³⁴。

二度も「批評する意図はない」と繰り返しながらも、『二十世紀の神話』をきわめて端的に批評しているのが見て取れるだろう。一時は本人も戦後に認めるように「ナチス精神の鼓舞に一時力瘤を入れ」て、ローゼンベルクにしても「初めの二、三章をひとわり読んでみて、その元気のいい、いや、むしろ強烈な論調によって、一種の感激のようなものに牽き込まれ」³⁵ていた吹田はしかし、優れた翻訳者であり学者でもあった。昭和20年3月に発行された『独逸精神科学研究』などでも、吹田は動態的・静態的というキーワードで、ドイツ精神と比べた日本精神の根幹を「中正」と論じるが、ドイツ民族と日本民族についての「ヒットラー総統の考え（『わが闘争』）についても、私としては或る異見を持っていることだけを述べて置きたい」³⁶と記し、すべてを諸手を挙げて受容はしない。ナチス体験をすでにその最初から

³² 吹田順助『旅人の夜の歌——自伝——』東京：講談社 1959年、254頁。

³³ 『旅人の夜の歌』、254頁。

³⁴ 『二十世紀の神話』、解説（XXI-XXII頁）。

³⁵ 『旅人の夜の歌』、253頁。

³⁶ 吹田順助「日本精神論——ドイツ精神との比較において」：『独逸精神科学研究』第四輯 独逸文化研究所編 東京：伊藤書店創立事務所 1945年、13頁。

「いわば理想化」すると同時に、相対的に捉えることができたわけである³⁷。われわれは戦前・戦中の吹田の心情を、さまざまな断片から推し量るしかできない。確かに吹田はナチスに一時単なる興味を超えた賛意を、少なくとも一面的には示した。それは、山形高等学校在職中の「留学中に親しく体験した」「第一次世界大戦後の疲弊と困憊とを極めたドイツ」³⁸への同情もあったろうし、なにより本稿で検証してきたように、おそらく「地」への執着と重なる、吹田自身が抱いていた故郷としての国への、愛国の情とも無関係ではない。ただし、その当時でも吹田は学者としての客観的立場は忘れていない。そしてなによりも、翻訳の調査からも明らかに知れたように、推敲し続けるひとである吹田は、ある種のドイツ文学者に見られたような、戦後になって過去を積極的に忘却する姿は見せない。吹田順助とは、過去の自身の著作・翻訳と向きあうこと、そしてよりよき自己のため推敲を続けることを厭わなかった翻訳者・文学者であったとはいえないだろうか。

³⁷ もちろん筆者はそれによって、影響力のある学者・教育者・文化人が限定的にせよナチスを称揚した事実、その影響の及んだであろう範囲、そしてそれが惹起したであろうさまざまな言論・行動のそれぞれが覆い隠されるべきとはまったく思わない。しかし、我が身をその時代に置いてみようとすると、その時代に生きたひとびとの、あるいはその時代自体の厳しさともいうべきものを、そしてそのなかで自己のある部分は失わなかったひとびとの思想の堅牢さへの驚嘆をともに感じざるをえない。

³⁸ 『旅人の夜の歌』、253頁。

The Translators of Yamagata (4): Translators under the Shadow of the Nazi Regime

Kenji Kato

Junsuke Suita (1883-1963) was a famous scholar of German literature and thought in the pre- and post-war periods in Japan who translated several works of Friedrich Hebbel, Heinrich Kleist and, most famously, Alfred Rosenberg's *The Myth of the Twentieth Century*. Although he left Yamagata after only four years to teach at Tokyo University of Commerce, we have several documents at the Yamagata University Kojirakawa Campus Library that allow us to examine his translation methods. By carefully comparing an earlier translation of Hebbel's *Judith* which had been corrected and revised with handwritten annotations – most likely by Suita himself – with later translations, we are able to see how Suita continued to correct and polish his already published translations. His corrections included the amending of simple mistakes, revision of out-of-date expressions and other improvements.

During the WWII period, some Japanese scholars of German literature were requested to cooperate with Japanese military authorities by translating so-called “Nazi literature”, which itself is not easily defined because of the diversity in and multidimensional thoughts of the Nazis themselves. One of the most famous was the scholar and translator Kenji Takahashi, who has been harshly criticized for his cooperative attitude towards the military and of his approval of Nazi ideas. Post-war criticism is mainly aimed at his role as a manager of cultural issues in the Imperial Rule Assistance Association and his failure to confess his transgressions or express penitence after the war. Hiroshi Henmi, who helped to translate and served as the editor of *The Newest Fruits of Nazis Literature*, was also seemingly unable to publicly acknowledge his translations of Nazi literature after the war.

In contrast to these translators, Suita, who had authored several essays on the Nazis, offered an objective assessment of *The Myth of the Twentieth Century* as the author's “personal convictions” in the foreword to his translation, and in his autobiography he also displayed – albeit with some hesitation – regret for once having so actively introduced Nazi ideas. Although his former approval of Nazi ideas cannot be neutralized with such an admission, Suita's forthright acknowledgement of his past actions echoes his sincere attitude towards his translations, which he was always ready to amend and correct, and demonstrates him to be a true translator and scholar.